

2024年3月24日「十字架上の赦し」

ルカの福音書 23章 32～43節

「十字架につけろ」という叫び声に圧倒され、ついにピラトは十字架刑を決断しました。罪のないお方が極刑につくことになったのです。

### 1. 十字架につけられた主のお言葉 (32～34節)

①ふたりの犯罪人 (32)「ほかにもふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。」

イエス・キリストの十字架刑が決まりました。ドロローサの道を十字架を担いで進まれました。シモンというクレネ人が手助けに入りました(26節)。ところで、イエスと共に、十字架につけられることになった二人がいました。彼らはれっきとした犯罪人でした。ローマ法に基づいて十字架につけられることになっていた人々たちです。

②三本の十字架 (33)『どくろ』と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとりには右に、ひとりには左に。」

ゴルゴダの丘は、その形状が頭蓋骨のようであったことから、そこにたくさんの人骨が埋められていたことから、「どくろ」と呼ばれていました。その丘の上の真中にイエスは十字架につけられ、その両脇に犯罪人たちが十字架につけられたのです。午前9時でした(マルコ 15:25)

③究極の赦し (34)「そのとき、イエスはこう言われた。『父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。』彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。」

イエスは十字架上で七つ言葉を述べました。その中の一つです。イエスは十字架上で、自分を十字架につけた人々(先週これについて学び、私たちが張本人だと確認しました)に言われたのです。『父よ。彼らをお赦しください』。究極の赦しのお言葉です。さらに『彼らは、何をしているのか自分でわからないのです』といわれましたが、罪の本質がここにあります。こんなに重要な事が語られているのに、十字架の下では兵士たちはくじを引いて、イエスの着物を分け合っていました。これが人間です。

### 2. あざけりやあざ笑い (35～38節)

①指導者たちのあざ笑い (35)「民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。『あれは他人を救った。もし、神の子キリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。』」

十字架の様子を見ている人々がありました。その中のユダヤ人指導者達はあざ笑って言いました。『他人は救ったが、自分は救えないのか』

『神の子キリストのくせして』などと、イエスの深い愛のことなどは全く受け止めようとせずに言うのでした。

②兵士たちのあざけり (36～37)「兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、『ユダヤ人の王なら、自分を救え』と言った。」



兵士たちが言うことも同じようなものでした。親切心からか、ふざけてかはわかりませんが、痛みを和らげる酸いぶどう酒を差しだして、『ユダヤの王なのだろう。自分を救ったらどうだ。』と攻撃しました。

③ユダヤ人の王と書いた札 (38) 『これはユダヤ人の王』と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。』

ギリシャ語とヘブル語とラテン語で「これはユダヤ人の王」と書いた札が十字架の上に掲げてありました(ヨハネ 19:20)。ピラトに述べたことに基づいているのですが、それは皮肉でした。しかし、イエスが本当の王であることは、彼らが知らねばならないことでした。

3. 十字架につけられた二人と主イエス (39～43 節)

①十字架につけられた一人 (39) 「十字架にかけられていた犯罪人のひとりにはイエスに悪口を言い、『あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え』と言った。

次は十字架につけられた犯罪人の反応です。その一人はイエスの悪口です。『あなたがキリスト(救い主)なら、自分と俺たちを救ったらどうだ』。彼が使っている救いというのは、危険などからの身体の救いです。魂の救いのことは度外視しています。

②十字架につけられたもう一人 (40～41) 「ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。『おまえは神をも恐れはないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だが、この方は、悪いことは何もしなかったのだ。』

ところが、もう一人は違いました。キリストへの信仰があるのかと思えるほどです。『お前は神を恐れはないのか』ともう一人の犯罪人をたしなめ、『俺たちは自分達の悪事の結果として、刑罰を受けているのだ。だが、この方は何も悪い事をせずに、十字架刑を受けているのだぞ。』キリストについての理解が明確です。前から、福音を聞いていたのでしょうか。彼には恵みによりイエスを主とするようになっていました。

③パラダイス (42～43) 「そして、言った。『イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出して下さい。』イエスは、彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。』

彼は魂の救いを求めていました。そして、願ったのです。『イエスさま御国の位にお着きになるときは、私を思い出して下さい』。彼には確かに信仰がありました。使徒信条に「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目によみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり」とある内容を、彼なりに信じていたのです。主イエスは言われました。『あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。』。光栄なお言葉でした。パラダイスは「信者が死後に憩う場所」「天上の楽園」といった意味です。この死刑囚は幸いでした。

《結論》 「赦し」は人間にとって最大の宿題の一つと言って良いでしょう。主日礼拝でもささげている、主の祈りのなかにも、「我らに罪をおかす者を、我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。」とあります。主イエスが教えられたこの祈りにおいて、人間関係についての祈りはこの部分だけです。主イエスが赦しの重要性をお考えになっているからであります。

イエスは弟子のペテロからこのような質問を受けました。「主よ。兄弟が私に対して罪を犯した場合、何度まで赦すべきでしょうか。七度まででしょうか。」それに対して、イエスは「七度まで、などとわたしは言いません。七度を七十倍するまでと言います。」と答えられました(マタイ 18:21～22)。

私たちがこのお言葉を受けた時には、とても実践することはできないと思うでしょう。現実生きる私たちにとって、人を赦すことは難しいですが、まずはさばくのではなく赦す心が備えられるよう祈ります。

この課題について主イエス様は体を張って、教えられました。それが今朝の聖書箇所にあります。主はゴルゴダの丘で十字架につけられました。十字架刑というのは、ローマ帝国の死刑でも極刑です。十字架に両手、足を釘で打ちつけます。即死しません。じわじわと出血します。イエス・キリスの場合、9時に十字架につけられ、3時に「父よ。わが霊を御手にゆだねます」(46 節)と言われて、息をひきとられました。実に6 時間にわたって、痛み苦しみが襲い続けるのです。その主は、十字架につけられて間もなく言われました。『父よ。彼らをお赦しください。彼らは自分で何をしているのか自分でわからないのです』。十字架刑を決定したピラト、扇動した人たち、十字架刑を求めて叫んだ人々を目の前にして、「彼らをお赦しください。」と祈られました。究極の苦痛の中に主は人々の自分に対する罪を赦されたのです。先週は、私たちも十字架につけた張本人であることを確認しました。ということは、主イエスは、時代を経た私たちの罪をも、悔い改めに応じて、赦しを与えてくださるのです。

主は「彼らは何をしているのか、自分でわからずにいるのです」とも言われました。十字架刑を叫んだ人々は、自分の愚かさ、罪に気づいていませんでした。私たちはどうでしょう。私たちも自分の罪に鈍感な者たちであります。使徒パウロですら、「私は自分のしていることがわかりません。私は自分のしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っている」(ローマ 7:15)と告白しています。主イエスは、そんな罪人の身代りになって十字架につけくださったのです。

トルストイの短編にこのような物語がありました。冤罪で生涯を獄中で過ごした囚人は、キリストを信じる老模範囚として敬愛されていました。ところが、その獄に一人の犯罪人が入ってきました。話を聞いていると、彼こそが真犯人であることがわかったのです。この男のために老模範囚は一生を棒に振ったのです。身代わりの人生でした。彼は苦しみを越えて赦しへと到達するのです。

十字架につけられた一人の男は、自らの罪を認めて主に赦しを請いました。私たちも、十字架上で赦してくださった主を見上げ、素直に主の前に罪を告白していきましょう。そこに、十字架の主からの赦しは備えられていくのです。